慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	手紙を読む : ゾラの『書簡集』をめぐって
Sub Title	Lire les lettres : réflexions sur la Correspondance de Zola
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kosei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.2 (2011. 12) ,p.148(109)- 165(92)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	牛場暁夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010002-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

手紙を読む
――ゾラの『書簡集』をめぐって

小倉孝誠

作家は手紙を書くのが好きだ。作家の著作集や全集とは別に、その書簡集が独立したかたちで刊行されることが多い。筆者は最近エミール・ゾラ（1840 – 1902）の書簡集を邦訳する機会に恵まれた。本稿はその経験をつうじて得た考察を覚え書風に綴ったものである。

19世紀作家の書簡集の特徴

手紙が作家の文学観や、作品の構想と執筆過程について貴重な、時には唯一の情報をもたらしてくれるということは久しい以前から認識されていたし、そのかぎりで文学研究に不可欠な資料であることは疑問の余地がなかった。作品を同時期の手紙と並行して読み進めるというのは、しばしば試みられる身ぶりである。そしてそれが現在も有効な方法であることは間違いない。その際、研究者が関心を持ち、精読するのは当の作家が書いた手紙の文面である。ところが言うまでもなく、手紙は常に誰かへの返事として書かれるし、その手紙は常に相手からの返事を求めている。手紙とは二人の人間のあいだに交わされる文字による対話であり、応答なのだから、厳密に言えば、一通の手紙が有する多様な次元を把握するためには、その手紙がいかなる手紙への応答として書かれたのか、そして相手がどのような返信を認めたのかを知らなければならないだろう。

そうした認識が背景にあって、フランスの出版界における近年の傾向として、大作家の書簡集に関しては作家が書き送った手紙だけでなく、その

作家が受け取った手紙、さらにはその作家をめぐって第三者同士のあいだで交わされた手紙までも収集するという動きが目立つ。フランス語ではCorrespondance générale と呼ばれる。ヴォルテールやルソーに関しては、すでに1960年代からそのような試みが実現していた。19世紀の作家をめぐる最近の顕著な成果としてはスタンダールの書簡集（6巻、1997－99）、ゴーティエの書簡集（12巻、1985－2000）、ミシュレの書簡集（12巻、1994－2001）、そして1995年に刊行が始まったエルネスト・ルナンの書簡集（現在のところ3巻まで刊行）などが挙げられよう。じつに徹底的な編纂作業であり、内的および外的な証言を網羅して、一人の作家あるいは思想家の内面性と伝記的細部を遺漏なく再構成しようとする執念を感じさせる。

では『ルーゴン＝マッカール叢書』の作家ゾラは、生涯にいったいどれくらいの手紙を書いたのだろうか。およそ1万5千通と推定されており、現在残されているのはそのうちの三分の一程度である。自筆原稿は部分的にフランス内外の図書館に保存されているが、大部分は個人の所有であり、いまだに作家の手稿を取り扱う競売をつうじて市場に出回ることがある。他方ゾラが受け取った手紙の数はそれ以上で、約2万通に上るだろうと言われている[(1)]。例外を除いて、その大部分は現在までのところ公刊されていない。例外とは相手が著名人の場合で、たとえばゾラがフロベールや、マラルメや、セザンヌから受け取った手紙は、彼らの書簡集に収録されているということである。

大作家はすべて、律儀な手紙の書き手だったと言えるだろう。分量からいっても、その内容の興味深さからいっても、書簡集は作家の美学と人間観を考察するうえで本質的なテクストであり、詩、小説、戯曲、批評と並んで作家の著作集の一部を成す。回想録、自伝、日記なども手紙と同じく内面性や私的側面を語る言説である。自伝を執筆せず、日記も付けなかった作家は多いが（たとえばゾラ）、手紙を書かなかった作家はいない。実際、その書簡集がさまざまな意味で特筆に値する19世紀の作家は枚挙に暇がないほどだ。バルザックが恋人ハンスカ夫人に20年間にわたって書き続

けた情熱的な手紙、フロベールが恋人ルイーズ・コレに宛て、『ボヴァリー夫人』の進捗状況を詳細に綴った手紙、若き日のマラルメが自らの文学理念を展開した親友アンリ・カザリス宛の手紙などが、すぐに想起される例だろう。作家が書いた手紙の数は、現代のわれわれから見れば瞠目するほどだ。メリメは5千通、フロベールは4千通以上、ミシュレは約1万通、そしてジョルジュ・サンドに至っては生涯に1万8千通の手紙を書き送った！

しかもこれは現在残されている手紙の数であり、消失した、あるいは散逸した手紙を含めればこの数字はさらに増える。文学者だけの話ではないが、19世紀はまさしく「手紙の時代」だったのである[(2)]。

しかも17世紀の古典主義時代や、18世紀の啓蒙主義時代に較べて、ロマン主義以降の手紙には一つの際立った特徴がある。17世紀、書簡は一つの文学ジャンルであり、書簡は特定の相手に向けて差し出されるとはいえ、名宛人の家族や友人たちの前で朗読されるのが通例だった。手紙はまったくプライヴェートな言説ではなく、半ば公的な空間で流通するものだったのである。その事情は18世紀に入っても変わらない。ディドロやヴォルテールの手紙が典型的な例を示しているように、しばしばサロンに集う人々の前で読まれる手紙は社交や知的議論のための不可欠な媒体、感性を研ぎ澄ませ思想を練磨するための重要な手段にほかならなかった。

他方18世紀末から19世紀初期にかけて、手紙とは何よりもまず個人の内面性、私的な考えと感覚を述べる場に変わる。それは公的な場所に向けて発せられる言説ではなく、特定の相手だけに読まれることを望む秘められたささやきである[(3)]。ロマン主義とブルジョワ社会は個人の「私性 intimité」を吐露し、「プライヴァシー」を擁護した。ジョルジュ・サンドは、自分の手紙を受け取った相手がそれを第三者に見せることをひどく嫌った。第三者に読まれると分かれば、宛名人との特別な二者関係に亀裂が入り、それまでと同じような精神で手紙を書き送ることができなくなる、と嘆いたのである。

同じ時期に、自伝と日記（フランス語では journal intime）というやはり私性を特権化する二つの表現形式が誕生したのはけっして偶然ではない。

「私性」は保護され、顕揚され、表現されるに値するという意識が強まった。18世紀末から19世紀初頭に至るロマン主義時代は、まさに人間の内面性とその表現をめぐって一大変革が生じた時代だったのである。エミール・ゾラはそうした趨勢が続いた19世紀後半という時代の中で生き、数多くの手紙を綴った。

ゾラの書簡集を編む

生涯に1万5千通の手紙を書いたとされ、そのうちほぼ5千通が活字のかたちで読めるゾラは、どちらの数字を見ても多産な書簡作家と呼ばれるにふさわしい。しかしその全貌が明確な像を結ぶようになったのは最近のことである。1902年に死んだゾラの書簡集が体系的に収集整理され、詳細な注釈とともに読者に供されるまでには、ほぼ一世紀という時を経なければならなかった。

なぜ、そのような事態が出来したのだろうか。

19世紀以降、手紙というのは特定の相手に向けて放たれる言葉であり、名宛人以外の者が読むことは通常は想定されていない。それは書き手と読み手の間に交わされる静かな、ときには秘密の対話である。当然、第三者には読まれたくない内容、差し障りのある内容を含むことがあるし、場合によっては他人の名誉や尊厳を損なう危険すらあるだろう。手紙は作家の好ましくない性癖を暴露し、文通相手たちの秘密までも白日のもとに晒しかねない。作家の素顔を露呈させる書簡集は両刃の剣である。作家としての栄光や名誉をいっそう高めてくれるような文面もあれば、人間としての器を矮小化するような手紙もある。

そのためたとえ大作家の書簡集といえども（あるいは大作家の書簡集だからこそ)、少なからぬ手紙が意図的に隠蔽されたり、部分的に削除されたり、ときには勝手に改竄されたりするということが稀ではなかった。作家の遺族がそれを命じたり、書簡集の編纂者が遺族の心情や、ためらいや、自尊心に配慮したりした結果、そのような事態が生じていたのである。実際、死後ほどなくして刊行されたバルザックやフロベールの最初の書簡集

はそのような弊害を免れていなかった。信頼に足りる本当の意味での書簡集を編むことは、長い間けっして容易な作業ではなかったのだ。

ゾラの場合、これまで何度か全集あるいはそれに近い著作集が編まれ、そのたびに書簡集にも一、二巻当てられてきた。ファスケル版（1907－08）では347通、ベルヌアール版（1928－29）では614通、セルクル版（1966－70）版では387通の手紙が収められていた。そして20世紀末になってようやく、フランスとカナダの研究チームが共同作業の末に模範的な『書簡集』全10巻（1978－95）を完成させた[(4)]。手紙の本文だけでなく、適切な序文や詳細な注釈を伴ってゾラとその時代を再構成しようとした記念碑的な成果である。しかし、書簡集の編纂というのは終わりのない作業である。まとまった形で書物になると、それに引き寄せられるように、それまでどこかの整理棚や屋根裏部屋に眠っていた手紙が次々と発掘され、競売や古書店をつうじて姿を現わすからだ。ゾラの場合も例外ではない。新たに発見された一連の手紙は『書簡集第11巻　見出された手紙』（502通を収録）として、2010年にモントリオールで刊行されている[(5)]。また2004年には、ゾラ晩年の恋人であり、彼の二人の子供の母であるジャンヌ・ロズロ宛の手紙が1巻にまとめられている（その数207通）[(6)]。ちなみに、ジャンヌがゾラに書いた手紙は残念ながら一通も残されていない……。

ゾラは誰に手紙を書いたか

次に、ゾラが誰に宛てて、何通ぐらいの手紙を書いたのか簡単に見ておこう。

どんな書簡作者にも生涯を通じて、あるいは人生の特定の時期に密度の濃い手紙を数多く書き送る相手が存在するものだ。手紙とは距離を隔てて交わされる対話であり、対話は相手を選ぶ。特別に重要な位置をしめる対話者は友人や、恋人や、家族や、同業者ということになるだろう。ディドロにとってのソフィー・ヴォラン、バルザックにとってのハンスカ夫人、ジョルジュ・サンドにとってのフロベール、ミシュレにとってのアテナイ

ス、ルナンにとっての姉アンリエット、フロベールにとってのルイーズ・コレ、マラルメにとってのカザリス、そしてボードレールやプルーストにとっての母親、といったように。ゾラの場合はどうだったのだろうか。

まず家族や友人。一番多いのは妻アレクサンドリーヌ宛（315通）で、これは彼女が一人でイタリアに旅行した際や、ゾラがドレフュス事件後イギリス亡命中に頻繁に手紙を書いたからである。1888年からの恋人ジャンヌ宛の手紙は207通だが、最初の三年間に書かれた手紙はすべて失われた。音楽家ブリュノ（161通）、出版人シャルパンティエ（65通）、建築家ジュルダン（33通）はゾラの創作活動を間接的に支えた人たちである。エクスの中等学校時代の同窓生であるセザンヌ（29通）、バイ（30通）、ヴァラブレーグ（27通）に宛てた手紙は青年時代に集中しており、しばしば長く、感動的な内容になっている。

職業柄、同時代の作家仲間たちと交わした手紙は無数にあり、遣り取りが長い期間にわたって継続したのが特徴である。フロベール（27通）、エドモン・ド・ゴンクール（85通）はゾラより年長の作家で、彼らへの手紙には敬意が込められている。ドーデ（50通）、ユイスマンス（26通）、モーパッサン（12通）はほぼ同世代で、少なくとも初期のうちは類似した文学観を共有していたから、より親密な調子で率直に語りかけ、相手の作品を批評した文章が綴られている。数が最も多いのは年少の弟子筋に当たるセアール（252通）やアレクシ（76通）で、ゾラは彼らを折に触れて激励すると共に、自作の準備のため彼らに頻繁に情報提供を求めている。数は少ないがミルボー、マラルメ、ブールジェ、アナトール・フランス、バレス、ジッドなど、今日から見ればそれぞれの時代を代表するような作家に宛てた書簡も残されている。

さらに、外国の同業者に向けて書かれた手紙も無視できない。それは、世界的な名声を享受するようになったゾラの元に届いた、共感や称賛の手紙にたいする返事として書かれたものが多い。オランダ人ジャック・ヴァン・サンテン・コルフ宛の手紙（1883年11月30日付）でゾラは、「エミール・ゾラ、フランス」と封筒に書きさえすれば手紙が私の元に届く、とさり

げなく、しかし確信にあふれた語調で述べているが、それも傲慢な自惚れではなかった。こうしてロシアのツルゲーネフ（長い間パリに在住した）、イギリスのムーア、イタリアのヴェルガとデ・アミーチス、オーストリアのザッハー＝マゾッホ、カタルーニャのウリェーなどが文通相手として名前を連ねている。

次に、これもまたゾラの世界的声望に由来することだが、1870年代半ば以降、ゾラは外国の新聞雑誌に寄稿し、作品が外国語に翻訳される機会が増えた。それにともなって寄稿や翻訳の条件、著作権をめぐって、外国の編集者、翻訳者と交渉する手紙が取り交わされた。イギリスのヴィゼテリー（82通）、ロシアのスタシュレービチ（51通）、オランダのヴァン・サンテン・コルフ（53通）、スイスのロッド（32通）、アメリカのスタントン（24通）らに宛てた手紙は、当時の西欧における著作権の問題と、文学市場の複雑な力学を鮮やかに際立たせてくれる。

そして最後に、生涯のごく限られた時期とはいえ、ゾラにとって決定的な重要性をもったドレフュス事件の渦中に、作家は弁護士ラボリ（65通）、『オロール』紙主幹ヴォーガン（26通）らと頻繁に手紙を遣り取りした。残された手紙は少ないとはいえ、ドレフュス本人やクレマンソー（後に首相となる）に宛てられた手紙も貴重である。

では、ゾラの手紙は何を語っているのだろうか。あるいは、現代の読者から見てゾラの『書簡集』の興味はどこに見出せるのだろうか。

作家としての手紙――そのカテゴリーと言説の戦略

ゾラは何よりもまず作家であり、『ルーゴン＝マッカール叢書』全20巻の作者である。したがってゾラが文学について語っている手紙は当然われわれの関心を引きつける。そこにはいくつかのカテゴリーが識別できる。

（1）ゾラが自分の作品の構想、意図、プラン、進捗状況などについて述べる手紙。

いつ頃、どのような経緯でゾラが彼の傑作群を思いつき、その作品はどのような進度で書き継がれていったのか。そうした問いは、およそ作家の手紙を読む時あらゆる読者の脳裏をかすめる問いであり、書簡集は読者を作品生成の現場に立ち会わせてくれる。執筆状況をリアルタイムで伝えてくれる手紙があれば、相手の質問に答えるかたちで回顧的に自分の意図を説明する手紙もある。また出版された作品について自ら分析のメスを入れ、その欠陥や不備を冷静に指摘するような手紙も残されている。われわれは執筆する作家の喜びと苦渋、決断とためらい、実地調査のようす、情報や知識の収集、遭遇したさまざまな困難を垣間見ることができるのである。

こうしてゾラが『ジェルミナール』を準備するためにフランス北部の炭鉱地帯を視察し、『大地』を書くためにボース地方の農村地帯に滞在し、『壊滅』執筆のため普仏戦争の舞台となったフランス東部地方を巡り歩いたことを、読者は知る。『愛の一ページ』の各章の末尾に読まれるパリ風景の描写は、貧しい青年時代に学生街の屋根裏部屋から眺めていた風景に、その淵源が遡ることをわれわれは知らされる。そして『獣人』という象徴的なタイトルに辿りつくまでかなり逡巡したこと、鉄道小説と犯罪小説を融合させるという構想の妙をゾラが自負していたことが分かる。

この点で特権的な文通相手は、オランダ人ジャック・ヴァン・サンテン・コルフだ。数か国語に通じたこのジャーナリスト・批評家はゾラ文学を海外に紹介するとともに、海外で発表されたゾラ論をフランス語に訳して作家に送り届けた。ゾラは彼に全幅の信頼を寄せ、彼の求めに応じて自らの作品の意図について明瞭かつ詳細に語っており、興味が尽きない。ゾラ研究者たちの間で彼宛の手紙がしばしば引用されるのは、当然なのである。

(2) 執筆中の作品の細部を固めるため、ゾラはしばしば友人、知人に情報提供を求めた。自分で調査に赴く時間がない場合、あるいは事情に精通した友人がいる場合、彼らを積極的に活用した。『ナナ』で描かれる結婚式、ホテルの部屋、天然痘についてマルグリット・シャルパンティエとセ

アールに問い合わせた手紙、あるいは『ボヌール＝デ＝ダム百貨店』の建物配置について、友人の建築家ジュルダンに覚え書の作成を求めた手紙などがその例である。

(1)、(2) のカテゴリーに入る手紙はいずれも、ゾラ作品の成立過程に光を当ててくれるという意味で貴重だ。『ルーゴン＝マッカール叢書』に関しては、「準備ノート Dossiers préparatoires」と呼ばれる資料が残されている。これは各作品の構想、粗筋、作中人物の性格と行動、章の構成を記した覚書、諸々のエピソードに関わるメモ書き、読書ノートなどから構成されている膨大な量の資料（作品によって数百枚から数千枚に及ぶ）で、各作品の起源、生成、発展、逡巡について決定的な情報をもたらしてくれる。このような資料に依拠して進められる文学研究を「生成批評」と呼んでいるが、ゾラは準備ノートの豊富さゆえに、フロベール、プルースト、アラゴン、ヴァレリーらと並んでこの生成批評が最も活況を呈している作家の一人にほかならない。

ただし、ゾラの準備ノートは作品の構想や思想については教えてくれるが、実際の執筆リズムや、執筆中のゾラの精神状態については何も伝えてくれない。それは見事に分類され、プログラム化された創作用の資料だが、実際に小説が書き綴られていく過程についてはほとんど何も語ってくれない。書簡集はその点を補いつつ、創作現場の雰囲気を示してくれるという意味で興味深いのである。

(3) 作品をめぐる自己弁明の手紙。

ゾラの作品はまず新聞に連載され、その後に単行本として刊行されたが、新聞連載中からきびしい批判に晒されることが少なくなかった。そしてその批判が間接的な宣伝効果を発揮し、ゾラの知名度を高めたことは否定できない。ゾラは批判にたいして即座に反駁する。とりわけその批判が不当なものと思われた場合には。そうした手紙はゾラが自分の作品にどのような意味を盛り込み、作家の位置をどのように規定し、文学の価値と機能をいかに認識していたかをよく伝えてくれる。これらの手紙は、ゾラが

同時期に書いた批評記事と共鳴しているので、併せて読むことでその真価がより鮮明になる。

『獲物の分け前』が不道徳だとして共和国検事から警告されると、ゾラはこの小説が「風俗が堕落し、家族の絆が消滅したとき私たちがいかに恐ろしい崩壊に至るかを示そう」としたのだと反論した（ユルバック宛、1871年11月6日）。『居酒屋』がパリの労働者をあまりに暗く染め上げていると非難されると、ゾラは民衆の病弊と苦しみを抉り出すことによって自分は道徳的な作品を書いたのだ、と反駁した（イヴ・ギュイヨ宛、1877年2月10日）。『ごった煮』の作中人物名をめぐって掲載紙とゾラ自身が名誉棄損で訴訟を起こされると、名前が作中人物の本質の一部であり、たまたま同名の人間が世間にいるからといって人物名を変更できない、と作家は強い口調で抗議した（エリー・ド・シオン宛、1882年1月29日）。

そして『ジェルミナール』が炭鉱労働者の実体を歪めているという批判にたいしては、実地調査と資料に依拠した正確な叙述であると主張した（マニャール宛、1885年4月4日）。観念としての、社会運動の担い手としての「民衆」を論じたのはロマン主義時代の歴史家や社会主義者（たとえばラムネやミシュレ）だが、労働し、生活する主体、愛し苦しむ主体としての民衆をその生々しい現実において表象したのは、19世紀後半の文学である。実際ゾラは、『居酒屋』や『ジェルミナール』を執筆することによって、民衆の生態と現実を把握したのだった。

これらの手紙は、一義的には特定の人物に宛てられた手紙だが、同時に関係する新聞に公表されたものだ。ここにはゾラの書簡集がしばしば公的な性格を有していたという、特異性が見て取れる。手紙といえば一般に私的な語り、プライヴェートな言葉と思われがちだが、ゾラの場合そればかりではなかった。いま挙げた手紙のほかにも、ゾラが自らの文学について述べた手紙で新聞や雑誌に公表されたものは少なくない。ゾラはしばしば、批評家やジャーナリストたちとの論争をつうじて、自分の文学観を明確にしていったのである。ゾラにとって、手紙は自己主張と弁明の言語空間だった。

19世紀後半に飛躍的な発展を遂げたフランスのジャーナリズムは、文学論争を公的な世論の場に導き入れたと言えよう。大多数の作家が恒常的に、あるいは生涯の一時期に新聞・雑誌に寄稿したこの時代、ピエール・ブルデューの言葉を借りるならば、「文学場」はジャーナリズムという「文化空間」の力学と無縁ではいられなかったということである。「公開書簡 lettre ouverte」という形式は、その意味でじつによく時代を表わしている。若い頃からジャーナリズムで活動し、その舞台裏を熟知していたゾラは、ジャーナリズムの戦略と修辞学を操ることに長けていた。論争を展開する巧妙さと、論敵に反駁する舌鋒の鋭さは、ジャーナリスト・ゾラの天性を浮き彫りにしてくれる。彼は論争を誘発し、演出することによって自分の文学理念を際立たせようとしたのである。

(4) 他の作家たちの作品を批評する手紙。

有名作家は誰でもそうだろうが、ゾラもまた1870年代以降は同業者や、見ず知らずの駆け出し作家から頻繁に著書を贈呈されるようになった。1880年代に入って名声が頂点に達すると、その傾向はいっそう加速する。そうした場合にありがちなように、丁寧とはいえ儀礼的で、いくらか表面的な書信も多く認められているが、丁寧に読んで詳細な感想と意見を書き送ったケースも少なくない。称賛の言葉にあふれた手紙があれば、慎重な留保をつけた手紙、ときには歯に衣着せぬ批判を述べた手紙もある。われわれ読者の側からすれば、そのような感想と意見をつうじてゾラ自身の文学観を窺い知ることができるのである。

たとえば僚友ユイスマンスに宛てた手紙で、ゾラは『マルト』、『流れのままに』、『さかしま』を注釈しながらこの作家の価値を正しく認識し、一時期はゾラと同じ文学潮流に棹差していたかに思われた彼が、やがて『さかしま』を契機に異なる感性と美学を奉じて新たな方向に踏み出そうとしていることを察知した。またミルボーの傑作『責め苦の庭』を論評した手紙（1899年6月1日）は、資質を異にする作家だけに作品をよく理解できたことを示す文章であろう。

文壇の年代記

1860年代からジャーナリズムと小説創作という二つの領域で活動し、1870年代末以降は新たな文学流派の領袖として称賛され、時には腐敗した文学の代表として非難されながらも、時代を代表する作家としての立場を堅持したゾラ。ジャーナリズムで培った人脈は広く、作家として友誼を結んだ人たちは少なくない。ゾラの名宛人の中に、同時代を代表する新聞『フィガロ』、『ゴーロワ』、『オロール』の社主や編集主幹が名を連ねているのはそのためである。また当時の主だった文学者、思想家でゾラから手紙を受け取っていない者、したがってゾラに手紙を書いていない者はほとんどいない。そうした手紙の数々を読めば、19世紀末、第三共和政初期のフランスの文壇事情が鮮やかに浮かび上がってくる。

まだまったく無名時代の若きゾラが、ユゴーやミシュレやサント＝ブーヴなどの大御所に自作を送付して、時には評を乞うというのは、駆け出し作家なら誰でもする行為だろう。1870年代後半ゾラがフロベール、エドモン・ド・ゴンクール、ツルゲーネフ、ドーデらに書き送った手紙を読むと、彼らがフロベールを中心に知的、文学的な共感を基にした一つの知識人集団を形成していたことが分かる。だからこそ、『感情教育』の作家の死（1880年）は、彼らにとって大きな衝撃であり、亀裂の始まりにもなってしまった。やがてゾラの周辺に年若いユイスマンス、モーパッサン、セアール、アレクシなどが集い、親睦を結んで、いわゆる自然主義文学グループが出来上がっていくが、それと並行するようにゴンクールとの関係は微妙に捩じれてゆき、修復しがたいまでに悪化していく。

文学創造と直接的な繋がりはないが、ゾラがアカデミー・フランセーズへの立候補をめぐってルナンやロティに宛てた手紙は、作家と世俗的栄光の関係、作家同士の微妙な好悪感情を露呈していて興味深い。ゾラは何度も立候補し、ついに選出されることはなかったが、現代から見ればそれはけっして彼の不名誉ではない。彼の価値は制度的な是認や称賛を超えて、十分に確立しているのだから。

1890年代に二度にわたって文芸家協会長を務めたゾラが、協会の名において彫刻家ロダンにバルザック像の制作を依頼する手紙や、弁護士ユアールに作家ブールジェと出版社ルメールの係争に介入するよう要請する手紙などは、文学者の利益を擁護するために奔走するゾラの姿を蘇らせてくれる。ちなみに、著作権はまだこの時点で国際的に法制化されておらず、だからこそゾラは外国の翻訳者たちへの手紙の中で、ときには執拗なまでに自分の利益を擁護しようとしたのだった。

文学者たちの友情と確執、協同と離反。文学界とジャーナリズムの密接で複雑な繋がり、作家と出版人の親しく、同時に微妙な関係、著作権を確立するための文学者たちの闘い。このようにゾラの書簡集は、第三共和政初期の文壇をめぐる見事な年代記になっているのである。

社会と政治へのコミット

書簡作者ゾラの第三の側面は、一市民として同時代の社会と政治に深く関わったことである。すでに20代の頃から新聞に時評や政治評論を書き出していたゾラは、有名作家になって作品の執筆に忙殺されるようになってからも、その姿勢を変えなかった。そのことは、たとえば1870－71年、普仏戦争からパリ・コミューンに至る時期のゾラの行動に明らかである。戦争、敗北、その後に続く政治的、社会的な大混乱の中で、彼はマルセイユ、ボルドー、パリと移動しながら、ある時は官職を得るために奔走し、またある時はボルドーやヴェルサイユの議会通信を新聞に掲載して、政治状況を詳しく報道し続けた。

社会にコミットする姿勢が最も鮮明に現れたのは、もちろんドレフュス事件に際してである。1898年1月13日付の『オロール』紙に発表した公開書簡「私は告発する！」がもとで裁判となり、有罪を宣告されたゾラはイギリスに亡命を余儀なくされた。そこで実際に身の危険を感じ、名前を隠匿しながらゾラは孤独で、ほとんど幽閉に近い状態で一年近い時を過ごしたのだった。一般に亡命や幽閉は、手紙や日記や回想録など内面的なエクリチュールを誘発しやすい。それを納得するには、アンネ・フランクがそ

の日記をアムステルダムの隠れ家に潜んでいた間に書いたことを想起すれば十分だろう。弁護士ラボリや政治家レナック宛の手紙は、ドレフュス派の同志に向けられた感謝と激励の言葉を綴っており、亡命中のため実際的な活動を禁じられている男が仲間に託した行動指針としても読める。その意味で公の活動を禁じられた亡命者にとっては、同志に手紙を書き送ること自体が一つの政治行動にほかならない。他方で同じ時期、妻アレクサンドリーヌやジャンヌに書き送った手紙には、亡命の孤独を嘆き、辛さを率直に訴える文面が並んでいる。

公人としてのエミール・ゾラ。自己の思想と信条に忠実だった彼は、私生活を犠牲にし、作家としてそれまで築き上げてきた栄光を剝奪される危険を冒してまで、ドレフュス事件に関与した。現代に至るまで、ドレフュス事件と言えばただちにゾラの名前が喚起されるのは彼の名誉である。19世紀を生きた作家のうちで、ユゴーを除けばゾラほど社会的威信の高かった作家はいないという、ゾラ研究の泰斗アンリ・ミットランの主張にはいささかも誇張はないのだ[(7)]。

普段着の作家

最後に残された手紙のグループが伝えてくれるのは、私人としてのゾラ、いわば普段着のゾラである。ここでは大きく二つに分けられる。

第一に、1858－60年にセザンヌとバイ宛に書かれた一連の手紙である。数はそれほど多くないが、一つ一つの手紙が長大なことが特徴的だ。それは手紙というより、自分の心情、恋愛観、人生観、芸術観などを筆の赴くまま一気呵成に書きなぐった告白と言ってよい。未来の大小説家が20歳前後に何を読み、何を考え、何を夢想していたのか、要するにその知的、文学的な形成を、これらの手紙は雄弁に伝えてくれる。バルザックが妹ロールに、あるいはマラルメが友人カザリスに宛てた手紙がそうであるように、青年時代の特権的な文通相手にたいして人は自らの内面性を隠しはしない。19世紀フランスにおいて人はいかにして作家となるのか――ゾラがセザンヌやバイに書き送った手紙は、それをめぐる貴重な証言になってい

る。

しかもセザンヌやバイとはその後も交際が続くものの、手紙の遣り取りはほぼこの時期に限られる。短い期間に、集中的に密度の濃い書簡が取り交わされたのだった。自伝も、回想録も、日記も書いたことのないゾラの場合、それはまさに内容面でも形式面でも稀有な手紙であり、青年期特有の高揚した文体と相俟って、独特の価値をおびる。知られざる意外なゾラの側面を示してくれるだけに、いっそう感動的な手紙群になっているのである。20世紀に刊行されたゾラ全集を構成する書簡集が、とりわけこの時期の手紙を数多く収めているのは偶然ではない。

若い時期の友人に遠慮は要らない。ゾラは手加減しないし、セザンヌの手紙を読むかぎり、彼もまたゾラには率直にすべてを打ち明けていた。壮年期の作品からは想像しがたいが、20歳前後のゾラはユゴーやミュッセの詩を暗唱できるほどに愛読し、ジョルジュ・サンドの小説を読んで女性の社会的立場に思いを致し、ミシュレの『愛』を読んだ興奮の中で熱狂的な恋愛哲学を開陳する。後に小説ジャンルの主題と構造を変えるゾラと、絵画に革命をもたらすセザンヌがこの当時、時代遅れのロマン主義にかぶれながら下手な詩をやたらに書き散らしていたと知れば、読者としては驚きと苦笑を禁じえないだろう。

20歳のゾラはまだ何者でもない。野心や夢だけはふんだんに抱きながら(20歳の青年は皆そうしたものだろう)、自分が何になれるかは分からない。自分が何になりたいのかも明瞭ではない。第二帝政期の華やかなパリの空の下、そうした華やかさの恩恵に浴することもなく、貧しさと寂寞の中で根なし草の放浪者生活を送っていた。誰も頼りにできない彼はすべてを自分の力で獲得し、築いていかねばならない。不安と焦燥に駆られないはずがなかった。セザンヌとバイに宛てた手紙は、そうした青年の不安と迷いを余すところなく語っている。

第二に、家族や親しい友人に書き送った手紙がある。なかでも特別な重要性を持つ名宛人は言うまでもなく妻アレクサンドリーヌと、恋人ジャンヌ・ロズロ、そして二人の子供である。彼女たちに宛てた手紙においては、

配慮を忘れない夫としての、あるいはやさしい恋人としての、あるいは微笑ましい父親としての姿が浮き彫りになる。アレクサンドリーヌとは若い時から苦楽を共にした仲であり、彼女はゾラの文学的闘いと、成功に至るまでの苦難の道を誰よりもよく知っていた。だからこそ彼女に宛てた手紙には、常にやさしい心遣いが感じられるのだ。1888年にジャンヌが出現してからゾラの感情生活は一変するが、それでも妻へのいたわりは変わらず、彼女がイタリアに旅行中や、自らのイギリス亡命時代は日記を綴るように、日常生活の瑣末的な細部もないがしろにすることなく、数多くの手紙を認めたのだった。

48歳の男が21歳の美しい女（ジャンヌ）と恋に落ちる。その結果、ゾラは二つの家庭を持ち、しばしば両者の間を往来することになった。ジャンヌはひたすら耐え、子供たちの母としての役割を全うしようと努めた。ゾラはジャンヌを本当の意味で幸福にできないことに、絶えず良心の呵責を感じていたのであり、彼の手紙はそうした苦悶と悲しみを明瞭に語ってくれる。他方で、おそらく多くの読者が期待するのに反して、ジャンヌ宛の手紙には、若い女との官能的な経験を語る言葉や、激しい情熱を誓うような甘い文章はほとんど皆無であり、愛する女に書いた手紙としてはじつに慎ましく、節度ある手紙としか言いようがない。

これは十九世紀の他の作家たちと比較した場合、際立った違いである。バルザックがハンスカ夫人に宛てた手紙では、高揚した恋愛感情がときに臆面もなく吐露されているし、ジョルジュ・サンドがミュッセに宛てた手紙、そしてフロベールがコレに宛てた手紙には、親密な打ち明け話や、共有した快楽を想起する文面が満ちあふれている。フロベールに至っては男の友人に書き送った手紙で、女性との性的な営みを露骨な言葉で叙述することさえめずらしくない。しかしゾラがジャンヌに宛てた手紙には、恋人同士が交わす手紙にありがちのそうした秘め事を喚起する言葉が綴られていないし、ゾラが友人への手紙の中でジャンヌとの愛の細部を語ることも皆無である。実際に会っていた時は、親密な打ち明け話をし、快楽の共有を想起することもあっただろうが、それを示唆するような言述は手紙に出

てこない。手紙の中のゾラは、ほとんど恋人ではないのだ。

ジャンヌ宛の手紙を編纂したアラン・パジェスによれば[8]、妻に手紙を奪い去られるという経験をした後、ゾラはジャンヌから手紙を受け取ると、返事を認めると同時にジャンヌ自身の手紙を同封して送り返したという。すべてを保存する習性のあったゾラだが、彼女からの手紙だけは自分の手元に置けなかったのである。かくしてジャンヌが、二人の間で交わされた書簡の全体を保管する役目を引き受けることになった。すでに指摘したように、今日ジャンヌの手紙は一通も残されていない。ゾラの死後、大切なのはゾラの手紙だけだと考えてジャンヌが自らの手紙をすべて破棄したのかもしれないし、1914に彼女が死去した際、何らかの経緯で消失したのかもしれない。いずれにしても、1931年に二人の娘ドゥニーズが回想録『娘が語るエミール・ゾラ』を出版した際、そこでは母の手紙にはまったく言及がなされていない。

ゾラの書簡集を読むことは、作家の伝記的事実を検証するのに役立つばかりではない。それは一人の作家の美学、文学観、世界観を知ることであり、記念碑的な作品群の生成過程を跡付けることであり、一つの時代の知的世界のありさまを垣間見ることであり、一つの社会の推移を辿ることにほかならない。『居酒屋』や『ナナ』の作家、自然主義文学の理論家、ドレフュス事件に際して敢然と国家権力に対峙した知識人としてのゾラは、わが国で未知ではない。『書簡集』はそれとは別のゾラの肖像を鮮やかに描いてくれるのである。

注

(1) Cf. John A.Walker, « Zola destinataire : 20,000 lettres à éditer », *Les Cahiers naturalistes*, No 61, 1987

(2) 19世紀の書簡に関する文化史的な研究としては、次の著作が参考になる。Roger Chartier (sous la direction de), *La Correspondance, les usages de*

la lettre au XIXe siècle, Fayard, 1991

(3) 手紙の形式と機能の歴史的変遷については、cf. Brigitte Diaz, *L'Épistolaire ou la pensée nomade*, PUF, 2002, ch. I ; Françoise Simonet-Tenant, *Journal personnel et correspondance (1785-1939) ou les affinités électives*, Académia Bruylant, 2009, p.36 sqq.　また桑瀬章二郎（編）『書簡を読む』（春風社、2009）は日本と欧米の作家の書簡集を取り上げて、書簡の戦略やレトリックを分析している。

(4) Émile Zola, *Correspondance,* 10 vol., sous la direction de Henri Mitterand et Bard Bakker, Presses de l'Université de Montréal et CNRS Éditions, 1978-1995

(5) Émile Zola, *Correspondance XI Lettres retrouvées*, édité par Owen Morgan et Dorothy Speirs, Presses de l'Université de Montréal, 2010

(6) Émile Zola, *Lettres à Jeanne Rozerot 1892-1902*, Gallimard, 2004

(7) Henri Mitterand, « Préface », Émile Zola, *Correspondance*, t.I, 1978, p.11

(8) Alain Pagès, « Préface », Émile Zola, *Lettres à Jeanne Rozerot 1892-1902*, p.18-26